

旦那様の御壽命今宵かぎりなりと宣告して、いそがしげに歸り去りしはドクトル、獨逸人なりとかさまで巧みならぬ英語にて、折ふしは見送る吾と笑ひ興ずることさへありしが、今日は恨めしき心地して、『御機嫌よう』も口のうちの戸あらゝかに、うちよりとごせり。

奥様は談話室の長椅子にうちふして、よゝと泣き沈み玉ふ。おなごさめの言葉もいせず。注射器を熱せんとて、厨下の瓦斯爐の前にたてる看護婦と顔見合せ、同じ想のため息いと苦しや。

午餐の食卓をしつらひて、奥様おこのみのもの二品三品ならべたれど、肉叉をとり玉はず。せめては珈琲にてもと、すゝめまいらせたるを、半ばのみさしてまだ泣き玉ふ。

空かさくもりて、またもしぐれんとす。旦那様の

お寝巻けふ洗ひてぞとにかけ置きたるを急ぎとり入る。

晚餐の卓には看護婦唯一人、カブリツク教徒なり、今宵はいつもの宗教論もせず、『ほんに人生は夢のやうですな』旦那様は人事不省、何のかなしみもないでせうが奥様がね』などしめやかにものがたる。

燈火のつくころドクトル再び来る。窓をうつ雨の音いとすざまじ。

おさんもこゝにこよかし、今宵はお別れなるべければと、奥様の仰せられたれば、旦那様の御枕もとにゆき悲しき想にて御顔を見つむ。すやすやと眠り玉へり。御息の音たのもしげなり。ドクトルの言葉疑はしやと、喜ばしくも思ふ。

室に入りてのちも旦那様のこと、かれよこれよと

想ひ起して眠られず。されど流石に終日の働につ
 かれたればにや、十時の時計をさゝたるのちは、
 いつしか熟睡しつ。

ふと夢さめて枕をかゆる刹那に、奥様のしのび泣
 の聲きこゆ。すはこそと起き出るとき、室の戸を
 叩きて看護婦來る。もの云はぬうちになづけば、
 かなたもうなづきかへして、そのまゝ立ち去る、顔
 の色蒼くして、首にかけたる黄金の十字架、手に
 せるランプに、映じてキラリと輝く。あくる日の
 四時半なり、息をひきとり玉ひしは、四時十五分
 なりとか。

廿二日

朝食の仕度してのち、且那様の室にゆくに白き
 巾に御顔を掩ひて、もの静かなる窓のあたり。ど
 ことなく寒き風の吹く心地す奥様は御自分の室に

こもり玉ひて思ふまゝなくめり、且那様の姉君も
 來り、奥様の兄君も來る。

二頭の馬、蹄の音あらくしくわが家の前にとま
 る。葬儀會社の馬車なり。一時間ばかりのうちに、
 浴室にて、且那様のなさからを洗ひきよめ、髻
 を剃り服を着せなどして、櫛下にはこび來る。

談話室にうるはしき寢臺据へられつ、白絹の布團
 ふくよかに、金糸にて繡せる枕いと神々しきが
 上に、さめぬ眠の人とならせ玉へり。カイゼル式と
 かの様に、はねあがりたる髻は、ありし日の散歩の
 御面色、御腕を胸に組み玉ひて、指環の寶石のみひ
 とり輝けど、やさしき御眼は再び開かれず。ア、。

且那様の兄君、奥様の御親族など來る。御ふたかた
 の知己友人など交り交り來る。門の戸には黒き絹
 を結びてかけたり、喪のしるしにや。食堂を客間

に充て庖厨にて食事をなす。奥様常の半はほど召

しあがり玉ふ。うれし。夕がたに奥様の喪服来る。

女教師仲間の誰彼よりつどひて着せまいらす。黒

き絹にて模様のならり。

親類中の美人なりとて、奥様のはめ玉ふお嬢さま

来る。奥様と共に食卓につく。鼠色の服を召し玉

へり。自動車にて訪れし客も四五人ありき。

廿三日

奥様けさは喪服を召し玉ひて、黒き覆面を用ゐら

る。午前は處々より花束来る。薔薇最も多し小なる

は花輪の形せるもあり、美しきリボンにてつかね

たるもあり。大なるは日の本の衝立位のものなど

あり。葦と薔薇にて巧みにつくりたるなかに。白

き鳥のとまれるもあり。何れも露重々しげに、か

をりいとめでたし。されどその花のいろいろにか

こまれてさめぬ眠につきつゝある人、あはれ、あ

はれ浮世の花の色香を得知るべしや。ピアノの上

には亡き人の両親の寫眞をはじめとして遺愛の寫

眞を安置せり。寢臺の傍らに美しき帛に掩はれ

し小机ぞ置かれたる。その上は一とまさのバイブ

ル、金縁あざやかにあがめられたり。

午後二時ゆかりある人々よりつどふ。兩名残りな

く晴れて、そとは日の光まばゆし。されどわが家

はいとしめやかにして、かなたにもこなたにも、

すゝり泣きの聲のみきこゆ。

肥え太りたるは長老なりとか。フロツクコート重

々しく、立ちて寢臺のかたはらにゆき、且那樣の

黒き襟飾をときて、白きものと換ゆ。

ほどなく僧正のましますとて皆々形をあらためて

坐す。僧正來れり。瘦せたるかたなり。

白き法服をまとい玉ふ。讚美歌、聖書朗讀、祈禱
 了りて、僧正のすゝめあり。神のめぐみを説き玉
 ふ御聲、高からねども力あり。手をあげて、天を
 指し玉ふとき、満座アーメンの聲いとしめやかな
 り。
 讚美歌の聲のうちに長老と僧正かへり玉ふ。一同
 寢臺のそばによりつどひて、また泣きはじむ。夕
 がた葬儀會社の馬車再び來る。明日は百哩はなれ
 し故里の墓地に葬むるよしにて、棺にをさめんが
 ためなり。銀にてところどころ飾れる長方形のは
 こに入らせ玉ふ。桃色の絹布團あたゝかにも見ゆ
 れど、氷よりもつめたき御手は苦の下に何をか携
 へゆき玉ふべき。御顔のところは玻璃の窓ありて
 御胸のあたりまで見え透く。上衣の襟に、白薔薇
 をかざし玉へり。あはれ露を帯びたる花にはまだ

命あれど、かざせるその人は、御魂なきのむくろ
 なりけり。
 廿四日。
 午前五時より働きはじむ。旅立つ人々のために食
 事の仕度をせんとてなり。卓につきしは五人。
 なき人の従弟とか、まだうら若き紳士、東部に
 てもの學びせるかたとか、いとみやびたるそぶり
 ゆかし。
 奥様の妹君、紅粉淡くよそひ玉ひて、黄金色の髪
 フランス佛蘭西ぶりにぞ束ね玉へる。且那樣のすぐ下の弟
 君、田舎にて農業營み玉へるときく、いつも沈
 黙を好ませ玉ふものを、けふはわけてさみしげに
 見うけらる。その妹なる夫人は喪服の上に十字架
 を帯び玉ふ。奥様は泣きはらし玉ひしお眼いと赤
 く、いつもの御容色あともとゞめず、いたましげ

なり。

やがてまたかの葬儀會社の馬車來る。いよ／＼且
那樣は家庭を見捨て玉ふことか、奥様の慟哭し玉
ふ御聲、わが胸のそこを刺すやうにて、危くも手
にもてる血を落とさんとせり。馬車の影見ゆる間
一同門に立ちて名残りを惜しむ。

七時十分、自動車にて奥様はじめ一同旅立ち玉
ふ。おさんはひとり留主居して、家の中とりかた
つけ、洗濯ものなどす。

夕かたより雲のけしきたゞならず、またもしぐれ
んとすらん。さだめなき空。さだめなき浮世。了

東様に申上候

淺草山之宿町十九、東光社より發行せる

「東光」云へるにも原稿送り有り候

御序もあらば御らん被下度候

四十八

魂のゆくゑ(九月)

メイキベツド(十一月)

はかに、お菓子、友光、浄土、師の面かげ、など
送り居り候

例の偏狹なる宗教觀、御恥かしく候へど三尺坊
は大入道たるべからず御一笑被下度候

